

## タイ中等教育のための漢字教材の制作

佐藤志穂・パリダー チラウッティナン

### 1. はじめに

国際交流基金の2018年度日本語教育機関調査によれば、タイの日本語学習者数は18万4,962人である。そのうち77.8%を占める14万3,872人の学習者が、中等教育機関で日本語を学んでいる。タイ後期中等教育（日本の高校に相当）における日本語教育は、学習時間に応じて3つの形態で実施されている。それは、①週に5コマ～7コマ程度学習する専攻コース<sup>(1)</sup>、②週に1コマ～2コマ程度学習する選択科目、③テストは行わないものの単位として認定される、週に1回程度学習する日本語クラブである。

漢字は主に①専攻コースにおいて学習されている。専攻コースでは、2017年に改訂版が出版されたタイ中等教育向けの初級教科書『あきこと友だち』（以下、『あきこ』）が広く使用されている。『あきこ』は全6巻29課から構成されており、専攻コースは1学年あたり2巻ずつ学習を進める。『あきこ』はタイ教育省が施行する「仏歴2551年（西暦2008年）基礎教育カリキュラム」を承け、「コミュニケーション能力の向上」をその基本方針としている（中尾・プラパー 2017：103-104）。この方針に基づいて、課ごとにタイの高校生にとって身近なトピックが設定されており、コミュニケーション上の学習目標（あきこ Can-do）が掲げられている。たとえば第2課のトピックは「学校案内」で、学習者は「学校の中のいろいろな場所を案内することができる」という目標の達成を目指す。また、タイに実在する地名や人物名、食べ物が登場したり、タイ語による文法解説や日本事情紹介が挿入されていたりと、タイの高校生が日本語や日本文化に親しみやすい内容となっている。漢字に関しては、専攻コースの学習者が『あきこ』を用いて日本語を学習する場合、3年間を通して309字の漢字に触れることになる<sup>(2)</sup>。

非漢字圏学習者にとって漢字は、その数の多さ、字形の複雑さ、読み方の多様さから、難しいという印象を持たれやすい。また、タイの中等教育機関で日本語教育を支える教師のうち約70%はタイ人教師であり（国際交流基金 2017）、漢字を教えることは困難を伴う。現に、教師からは「漢字は形・意味・読みが多様で、数も多いためどう教えればいいのかわからない。」「『あきこ』に準じた漢字教材を作りたいが、作り方が分からない。」といった声が聞かれている。

このような学習者と教師の声を受け、国際交流基金バンコク日本文化センター（以下、JFBKK）では、漢字に対する苦手意識を軽減し、漢字を楽しく学ぶ・教えることをサポートするための教材制作に着手した。本稿では教材の制作過程とその試用、試用結果を踏まえた改

善内容と、中等日本語教師を対象とした研修について報告する。なお教材は2019年3～5月に制作し、6～7月にかけて試用を実施した。そして8～10月を改善期間とし、11月～2020年2月にかけて漢字の教え方に関する教師研修を実施した。最終的に一連の教材は、2020年3月に JFBKK ホームページおよび YouTube チャンネルにて公開した。

## 2. 制作の目的と方針

学習者と教師の声を受け、教材を制作するにあたっては次のように目的を定めた。

- ① 教師の漢字指導に対する苦手意識を軽減する
- ② 学習者が漢字に親しみ楽しく学べる支援をする

そしてこの目的①②に向かい、次の方針を立てた。

- A. 『あきこ』の基本方針「コミュニケーション能力の向上」に従う
- B. 学習・指導方法の一例を示す
- C. 媒体は動画とする
- D. 教室の内外で使用できるものとする

まず教材は、JFBKK から一貫した支援ができるよう、方針 A. 『あきこ』の基本方針「コミュニケーション能力の向上」に従うこととした。たとえば第1課のトピックは「紹介」で、その学習目標は「自分の知っている人を他の人に紹介」できるようになることである。課の中では漢字「友」が「ウィロートさんはわたしの友だちです」という文を構成することばとして出現する。これを反映させて本教材では、「友」という単漢字としてではなく、人を紹介する場面で使う、「友だち」という漢字語彙として提示することとした。このようにある文脈や場面において漢字を捉えることができれば、漢字の意味がより捉えやすくなり、学習者が楽しく学ぶことに貢献できると考えた。

また『あきこ』では、コミュニケーション能力の向上を目指す中で「考える力を身に付ける」こと、「自分の学習を管理」することも大切にされている（中尾・プラパー 2017：104）。漢字も、学習者が自律的に継続して学べるようになることが重要であると考え、本教材は方針 B. 「学習・指導方法の一例を示す」に留めることとした。具体的には JFBKK からは、『あきこ』に含まれる漢字309字全てに対してではなく、初めに出現する31字を対象として教材を制作した。そして32番目から約100番目に提出される漢字は、研修にて、教師にパワーポイントでスライド教材を自作してもらうこととした。このように、漢字の学び方のバリエーションのひとつとして JFBKK から教材を例示できれば、その後、学習者は自分に合った学習方法を、教師は担当する学習者に合った指導法を考え、選択できる可能性が生まれる。『あきこ』に含まれる全漢字の教材を提供して学び方を固定するのではなく、学び方を自己決定できる余地を残すことで、より前向きに漢字学習・指導に取り組めるようになることを期待した。

教材の形式は、方針 C.媒体を動画とした。動画は、学習者の興味を引いて学習意欲を高め、教師の漢字指導に対する負担を軽減できる可能性があると考えたためである。学習者と教師それぞれの立場から捉えうる動画の利点は次の表1のとおりである。

表1 学習者と教師それぞれの立場から見た動画教材の利点

学習者	教師
<ul style="list-style-type: none"> <li>・イメージや文字にアニメーションを組み合わせ提示でき、視覚的に理解しやすい。</li> <li>・場所と時間を問わず、自分のペースで繰り返し視聴できることから、自習しやすい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・動画に学習項目とその提示順の両方が盛り込まれているため、動画を再生すればそれに沿って授業を進められる。教え方の指針が得られ、教具・教材を準備する負担が軽減される。</li> <li>・入手が容易である。ウェブ公開すれば無料で、紙媒体の教材よりも速く、広範囲に配布できる。</li> </ul>

なお制作にあたっては、パワーポイントのスライドを動画化した。

そして教材の利用環境に関しては、方針 D.教室の内外で使えるものを目指した。教室の中であれば、教師が動画を再生し、適宜学習者に声を掛け、反応を得ながら視聴することを、教室の外であれば、学習者が自分のペースで動画を視聴して漢字を独習することを想定した。

### 3. 教材の内容

目的①②とそれを達成するための方針 A-D に従い、漢字の学習ステップに応じて、表2に示す3種類の教材を制作した。

表2 教材の概要

教材	使用想定場面	目標	媒体
イントロダクション	漢字学習を始める前	漢字の基本的な知識と学習のポイントを知る。	動画
課の漢字紹介	初見の漢字を確認する時	パターン・字形を確認する。 意味を確認する。 漢字を含むことばの読み方を確認する。 漢字を含む文の読み方を確認する。	動画
復習クイズ	課の漢字を知った後	課に出てきた漢字の理解を確認する。	スライド

本章では、これら3つの教材の目標と内容について述べる。

#### 3.1 イントロダクション

イントロダクションは、漢字学習を始める前に視聴することを想定した動画である。学習者は、ひらがなとカタカナの学習を終えてすぐ、漢字の学習に入る。その心理的負担を和らげ、漢字の基本的な知識と学習ポイントを知ってスムーズに学習に入ることをねらいとした。「はじめまして！かんじくん」と題した5分程度の動画で、教室にやって来た「かんじくん」というキャラクターと、『あきこ』の登場人物「ナッターさん」らが漢字について問答を重ねるストーリー展開である。動画では表3に示すポイントを取り上げた。

表3 イン트로ダクション動画「はじめまして！かんじくん」で取り上げたポイント

ポイント	説明
いつ漢字を使うか	意味を表すのに使う。
どうして漢字を使うか	意味をはっきりさせるために使う。 「はははがいたい」と同音異義語の「はな」を提示し、漢字を使えばより明確に意味分けができることを紹介した。
『あきこ』第1巻目で出会う漢字の数	31字
漢字を整理するコツ	パターンに注目する。漢字の成り立ちに注目する。
漢字を書くコツ	漢字の筆順に従う。 上から下へ、左から右へという基本の運筆を紹介した。
漢字が読める利点	タイで見つけた、漢字表記を含む日本食レストランの看板を例にとり、漢字が読めれば、タイ語、ひらがな、カタカナに加え、さらなる情報が得られることを示した。

この6つのポイントと説明方法は、篠崎・小玉（2003）と「まるごと+（まるごとプラス）  
<https://a1.marugotoweb.jp/ja/introduction.php#kanji>」を参考に考案した。

### 3.2 課の漢字紹介

『あきこ』で初見の漢字が現れた際に視聴することを想定した動画である。漢字の「パターン・字形」と「意味」「読み方」そして「文における当該の漢字の使われ方」の確認を目標としている。気軽に視聴できるよう、1本あたり5分程度に収め、表4の漢字を制作対象とした。

表4 「課の漢字紹介」動画制作の対象とした漢字

課とトピック	課の学習目標（あきこ Can-do）	漢字
第1課 紹介	1. 初めて会った人に、自分の名前、国籍、学年などを言って、自己紹介をすることができる。 2. 自分の知っている人を他の人に紹介することができる。	友、人、日、本、父、母
第2課 学校案内	1. 学校の中の色々な場所を案内することができる。 2. 色々な場所について、どこにあるか、質問することができる。	女、子、男、上、下、中、木
第3課 学校の1日	1. 曜日や時刻、授業の時間割などについて、質問したり、答えたりすることができる。 2. 食べ物やスポーツ、科目などの好みについて、質問したり、答えたりすることができる。	月、火、水、金、土、好
第4課 通学	1. 通学の方法や通学にかかる時間などについて、質問したり答えたりすることができる。	行、来、学、校、寺、先、生、時、間、分、毎、半

全31字あり、これらの漢字は『あきこ』第1巻、第1課から第4課までで提示される。

動画の構成は、加納ほか（2011：2-6）に整理されている「学習者の考える漢字の難しさ」を参考にし、それを乗り越えられるよう検討した。表5にその内容をまとめる。なお、図1～図5のスライドショー版は次に掲載している。（<https://drive.google.com/file/d/1YTn6dNv0Wg7xnrcTQg2AVLF1WUUb5tCp/view>）

表5 漢字の難しさと動画における対策

漢字の難しさ	対策	
数の多さ	一度に目に入ってくる漢字を減らす。1本の動画で1字のみ取り上げる。	
字形の複雑さ	パターンの認識を優先する。	連想法を用い、 形と意味とを結びつける。
意味の複数性	課に出てきたことばの意味を提示する。	
読みの複数性	課に出てきたことばの読みを提示する。	
用法	課に出てきた例文を提示する。	

まず、数の多さに関しては、一度に学習者が目にする漢字を減らすことで対応し、1本の動画につき1字のみ取り上げることにした。

次に、字形の複雑さについてはパターン<sup>(3)</sup>を用いた。漢字をまずは大きく2つの部分に分けることで、漢字の構成が捉えやすくなることをねらった(図1)。

そして字形の認識を意味の理解へとつなげられるよう、図2に示す連想法を用いた。連想法はひらがな・カタカナの文字を、音、字形、絵のイメージなどによる連想の手法を利用して認識させる方法(国際交流基金 2011: 15-17)であるが、漢字にも応用することができると考えた。図2では「友」を、この漢字が出現するまでに学習済である「ナ」と「ヌ」という2つの部品に分けた。そして、「ナとヌは、a.友達 b.恋人です。」というストーリーをクイズ形式で提示した。このように、学習者にとって馴染みがある形(イメージ)にストーリーを重ねることで、漢字の形と意味を結びつけ、覚えやすくなることを期待した。なお、ここでも、負担が大きくなりすぎないように、『あきこ』に出てきた語・表現における意味に限り提示した。

一方、加納ほか(2011: 25-27)では、連想法は形と意味の理解にとどまり、読みと用法の学習につなげるには不十分であることが指摘されている。そこで連想法で形と意味を確認した後、図3のように、漢字をことばとして提示し、読みを確認した。

続いて、用法も確認できるよう、図4のように漢字を含む例文を提示し、意味を問うクイズを加えた。

なお、必要に応じて参照できるよう、最後に書き方を示したスライド<sup>(4)</sup>を加えた(図5)。いずれの段階においても、学習者が自分で考え、達成感を持ちながら漢字の情報が確認できるよう、選択式クイズを随所に設けた。

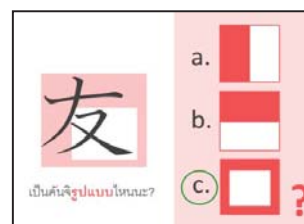


図1 パターン

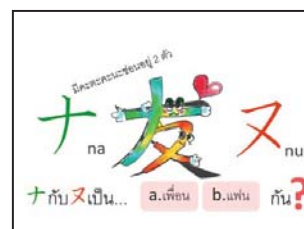


図2 連想法



図3 読み



図4 例文



図5 書き方

### 3.3 復習クイズ

これは「課の漢字紹介」で学んだ漢字を復習するための教材である。動画で見た漢字の「パターン・字形」「意味」「読み」を選択式クイズで問い、理解を確認するために制作した。教室で印刷して使用することも想定し、動画ではなくスライドショーの形式で配布することとした。

## 4. 教材の試用

教材が「①教師の漢字指導に対する苦手意識を軽減する」、「②学習者が漢字に親しみ楽しく学べる支援をする」目的に適っているかを確かめるため、試用を実施した。試用にあたっては、JFBKK からアクセス可能な、表6に示す首都圏の中等教育機関に協力を仰いだ。

表6 試用対象の学習者と教師の人数

学校（仮名）	A校	B校	C校	D校	E校	F校	計6校
学習者数	46	43	27	41	34	23	計214名
教師数	2	1	1	1	1	1	計7名

2019年6月から7月にかけて、計6校、学習者214名、教師7名に、3.2で示した「課の漢字紹介」動画13本（友、人、日、本、父、母、女、子、男、上、下、中、木）を使用してもらった。学習者は、ひらがな・カタカナの学習を終えて『あきこ』第1課、漢字の学習を開始する段階にある高校1年生で、教師は全員タイ人教師である。試用は、教室にて「課の漢字紹介」動画を視聴してもらった後、アンケートを行う手順で実施した。動画は、教室のスクリーンまたはテレビに投影した。そして、教師が適宜一時停止し、学習者に声を掛けたり、反応を仰いだりしながら視聴した。なお、報告者も試用の様子を見学した。

アンケートでは、教師に対しては「学習者の反応」と「教材の使いやすさ」を問うた。「学習者の反応」はタイ語で自由記述とし、「教材の使いやすさ」は各スライド（図1～図5）に対して5段階（とても使いやすい＝1、使いやすい＝2、どちらでもない＝3、あまり使いやすくない＝4、使いにくい＝5）で評価してもらった。そして、必要に応じてタイ語にてコメントを付記する形とした。一方、学習者に対しては次の3つの質問をした。それは、「①この漢字教材から何を学んだか」「②この教材を使用した後、漢字に対する気持ち・印象はどうなったか」「③気に入った点と改善してほしい点」である。学習者が率直な意見を述べられるよう、すべてタイ語で自由記述とした。

## 5. 試用結果

本章では、教師と学習者のアンケート回答を整理し、その結果を報告する。「教師の漢字指導に対する苦手意識を軽減する」「学習者が漢字に親しみ楽しく学べる支援をする」という教材の目的に合うコメントが寄せられた。その一方で、動画が長すぎるという難点が指摘された。

さらに、漢字の学習および指導においては特に「書き」が重視されていることも、明らかになった。

## 5.1 教師の回答

教師に、学習者の反応と教材の使いやすさを問うたところ、以下の意見が得られた。

A 校の教師：学習者が気に入ったようだ。漢字の学習がおもしろくなった。

B 校の教師：あまり勉強しない子の興味も引けた。

C 校の教師：学習者の集中が続かない。

D 校の教師：役立ったが時間がかかる。

E 校の教師：最初は興味を持ってくれたようだが、音楽だけでは眠くなるため読み方の音声も入れた方が良い。

なお、F 校の教師はこの質問に回答しなかった。

ここでは、学習者の興味を引ける利点が挙げられた一方、「集中が続かない」「時間がかかる」との意見も見られた。この指摘は5.2に示す学習者の意見とも一致しており、動画の長さが課題として浮かび上がった。

教材の使いやすさについては、5段階中、各スライド（図1～図5）の平均は1.8であった。とりわけ、書き方のスライド（図5）に対しては、次のコメントが寄せられた。B 校教師「とてもよかった。はっきり見られて学習者の記憶に残ると思う。」C 校教師「とても重要だ。教師の中でも書き順に詳しくない人がいるため、間違っって教える可能性がある。」D 校教師「とめ、はね、はらいも示してほしい。」この記述から、教師は漢字指導において「書き」を重視していると考えられる。

## 5.2 学習者の回答

①「この漢字教材から何を学んだか」に対する回答は図6のとおりであった。214名の調査対象者のうち、50%以上に当たる110名が「書き方を学んだ」と答えている。これは他の回答の約2倍に当たる。これより、書き方が強く印象に残ったことがうかがえる。

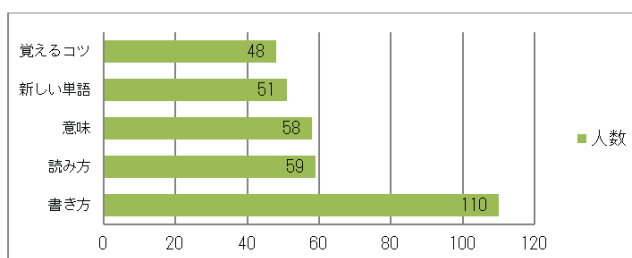


図6 「この漢字教材から何を学んだか」に対する回答

次に、②「この教材を使用した後、漢字に対する気持ち・印象はどうなったか」に対する回答を図7に示す。

「わかりやすい」(24.8%)、「面白い」(17.8%)、「覚えやすい」(14%)、「簡単」(12.1%)

という肯定的な回答が見られた。また、「(漢字は難しいが覚えることは一報告者注) 知識になる」と受け止めた学習者も約14.5%いた。これらの回答から教材は、学習者が漢字に親しみ、楽しんで学習に取り組むことに貢献できたと言える。

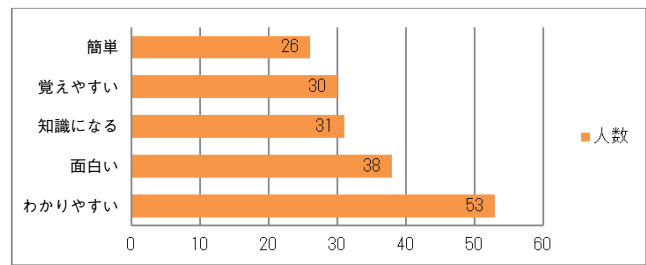


図7 「この教材を使用した後、漢字に対する気持ち・印象は怎么样了か」に対する回答

また、③「気に入った点」でも、学習者が動画に好感を持っていることが読み取れた。回答内容は分散したが、まとまった数の回答があったのは「わかりやすい」(14%)「メディア教材である」(10.7%)「イラスト」(9.8%)といった点であった。一方、「改善してほしい点」については、「長すぎる」(6.1%)「速すぎる」(12.6%)という回答が一定数寄せられた。

### 5.3 結果のまとめ

教師と学習者の意見から、教材が「漢字指導に対する苦手意識を軽減」し、「漢字に親しみ楽しく学ぶ」助けになる可能性が示唆された一方、課題も明らかになった。それは、動画の長さである。教師と学習者双方から、一度に数本の動画を視聴する場合には時間がかかり、集中が持続しないという意見が見られた。

また、教師と学習者共に「書き」に重きを置く漢字学習観を持っていることが明らかになった。試用版の教材では書き方のスライド(図5)は参考程度に使用される想定で、付加的なものとして挿入した。しかし実際には、学習者からは「書き方を学んだ」という回答が最も多く、教師からも書き方のスライド(図5)が特に好評を得ていた。この反応から、漢字学習においては特に「書き」が重視されていることがわかった。

## 6. 教材の改善

試用より、1本の動画が長く、集中が続かないという難点が見つかった。この課題を克服するため、漢字熟語や、意味的に関連する漢字をグルーピングし、1本の動画に統合した。以下、例として「日本」を取り上げる。なお、「日本」のスライドショー版は次に掲載している。

(<https://drive.google.com/file/d/1a9vILGn8en0h4eJNDqWcmAyIA4bHxGBs/view>)



表7 だい1か れんしゅう8「日本」の構成

動画	内容
	① 当該の漢字が出てきた場面・ページを確認する。
	② 学習することばを『あきこ』イラストと共に提示し、注意を引く。
	③ 字形を確認する。類似漢字と比較し、違いを際立たせる。
	④ イラストを提示し、意味を連想する。
	⑤ 各漢字の意味をもとに、2つの漢字が合わされば意味がどうなるか、考える。
	⑥ 『あきこ』に出てきたことばの読み方を提示し、確認する。
	⑦ 例文を提示する。
	⑧ 再度、クイズでことばの意味を確認する。
	⑨ 書き方を提示する。「本」についても同様に示す。
	⑩ 課で学ぶ漢字をスクラッチで提示する。学習済の漢字が消え、背景にある日本に関する写真が少しずつ見えてくる。ゴールを可視化して達成感を持ってもらえるようにした。

試用版では「日」と「本」とを別個の動画としていたが、『あきこ』で提示される「日本」ということばに合わせ、1本の動画にまとめた。また、①のように『あきこ』で当該の漢字が出てきた箇所を確認するステップを加え、漢字が使われる場面を想起しやすいようにした。そして、集中を維持できるよう③ではパターンの認識に加え、似た字と区別するクイズ等を挿入した。

なお、教師から教材に音声を入れてほしいという意見があったが、教室で視聴する際には各教師が自らの声で学習者の注意を喚起したり、適宜指示を与えたりすることができる。その方が自由度が増し、使いやすいと考え、改善版でも音声は挿入しないこととした。

## 7. 教師研修の実施

また、試用より学習者と教師が漢字学習において「書き」を重視していることがわかった。JFBKKにおける本漢字教材制作の目的は、「学習者が漢字に親しみ楽しく学べる支援をする」ことであった。しかし、出会う漢字が増えるにつれ「書く」ことが自己目的化し、漢字学習が手を動かすだけの単調な作業となつては、結局は学習者の漢字に対する苦手意識と結びついてしまう恐れがある。

JFBKKでは、中等教育機関に所属するタイ人日本語教師を対象として、教授法のブラッシュアップを図る研修を行っている。そこで2019年度は、「漢字の教え方ー楽しい入門レベルの漢字教材をつくってみようー」をテーマとして研修を実施することとした。研修では、JFBKK制作の漢字教材を用いながら、漢字を捉える複数の視点（字形の識別、漢字語彙としての意味、読み、文での使い方）を確認した。そのうえで教師に実際に漢字教材を作ってもらい、学習者が前向きに漢字学習に取り組むための指導法を検討するヒントを得てもらえればと考えた<sup>(5)</sup>。

研修では、①漢字の基礎的な知識を確認する、②漢字の指導目的を考える、③学習者に合わせた覚えやすい漢字教材を作成できるという3点を目標とした。そして、表8に示すようにタイ全国の4ヵ所で計5回実施した。

表8 教師研修の参加者数

実施日	開催地	参加者数(人)
2019年11月16日、17日	バンコク（首都圏）	46
2019年11月23日、24日	ウボンラーチャターニー（東北部）	44
2020年12月14日、15日	トラン（南部）	33
2020年 1月18日、19日	チェンマイ（北部）	44
2020年 2月 1日、 2日	バンコク（首都圏、2回目）	44

研修は1回あたりの週末の2日間で実施され、総勢211名の参加があった。

最終目標である目標③「学習者に合わせた覚えやすい漢字教材を作成できる」の達成につい

では、研修後アンケートの「研修中、漢字教材をどのように作成したか」という項目への回答から推察できる。ウボンラーチャターニー（東北部）の研修では以下の回答が得られた。「学習者の興味をひき、覚えやすいように、イメージとストーリーを使った連想によって、漢字の形、意味を導入する。(20件)」、「漢字をパターンに分ける練習をしてから、漢字のイメージとストーリーで覚えやすくする。(5件)」これらの回答から参加者が、「書く」以外の観点にも目を向けるようになったことがうかがえる。さらに他会場の研修でも、「漢字指導は (1) 形、意味、読み、(2) いつ教えるか、(3) 生徒を考慮しながら教材を作成する」「目的を決めて、教材作成をする」等、学習者にとっての学びやすさを意識する記述が確認できた。これらのアンケート回答から、教材作成体験が漢字指導を捉え直す契機となり、研修の目標も達成されたとと言える。

なお、研修で各自が作成した教材はそのまま授業で使えるよう、参加者間で共有した。さらに研修後、漢字教材を継続的に作成し、公開する SNS ページ「Kanji Kapi Nampla <https://www.facebook.com/kanji.kapinampla.3>」を立ち上げた参加者<sup>6)</sup>もあった。同ページでは図8に準ずる教材が日々更新されており、教師と学習者は自由に利用できる。



図8 SNS ページ「Kanji Kapi Nampla」で公開されている教材の例

## 8. おわりに

JFBKK では、タイ人日本語教師と学習者の声をうけ、①教師の漢字指導に対する苦手意識を軽減すること、②学習者が漢字に親しみ楽しく学べる支援をすることを目指して、漢字教材を制作した。制作の際には、4つの方針に従った。それは、A.『あきこ』の基本方針「コミュニケーション能力の向上」を重視すること、B.学習・指導方法の一例を示すこと、C.媒体は動画とすること、D.教室の内外で利用できるものを目指すことであった。

教材は、「イントロダクション」「課の漢字紹介」「復習クイズ」の3種類から構成される。このうち、「課の漢字紹介」の動画に関して、首都圏の中等教育機関6校の高校1年生と教師に試用してもらい、アンケートを実施した。試用より、動画の冗長性という課題と、「書き」を重視する漢字学習観が明らかになった。動画の冗長性に対しては、漢字をグルーピングして複数の動画を1本に統合したり、学習者の注意を喚起し、集中を促すステップを挿入したりして改善を図った。「書き」を重視する漢字学習観については、教師研修を実施し、JFBKK 制作の

漢字教材を用いながら、「書き」のほかに漢字を捉えるための視点を確認した。そのうえでスライド教材を実際に作成し、学習者が漢字に親しめる指導法を検討してもらうことを目指した。研修後には、継続して漢字教材を公開するための SNS ページを立ち上げた教師も見られた。

最終的に、「イントロダクション」「課の漢字紹介」動画は、Youtube チャンネル「The Japan Foundation, Bangkok」上に公開した (<https://www.youtube.com/channel/UCQ7gybL8k4HDDn24TojRBgg>)。また、紙媒体で使用する可能性を考え、「課の漢字紹介」のスライドショー版と「復習クイズ」を JFBKK のウェブサイトで公開した ([https://www.jfbkk.or.th/ja/akiko\\_powerpoint/](https://www.jfbkk.or.th/ja/akiko_powerpoint/))。本教材は、漢字学習・指導の動機づけに主眼を置いており、漢字を「使う」力の育成を確約するものには至っていない。今後の課題として、動機づけられた学習者が、実際のコミュニケーションにおいて漢字を使う力を身につけるのを支援する取り組みを行うことが挙げられる。

#### 〔注〕

- (1) 1コマ50分。1学年は2学期制で、学習時間は3年間で500時間程度である。
- (2) 改訂版『あきこ』では、旧版『あきこ』を引き継ぎ、各課の話題にあわせて平均10字の新出漢字が提示される。ブッサバーほか (2005: 153) によれば、旧日本語能力試験3級出題基準の漢字をカバーしている。
- (3) パターンは、『The Kodansha Kanji Learner's Dictionary: Revised and Expanded』Jack Halpern, 2013, Kodansha International を参考にして提示した。
- (4) 近藤武夫・中邑賢龍 (東京大学先端科学技術研究センター) とマイクロソフト株式会社の共同研究により開発された書き順付き文字スライドを使用した。入手先は「PowerPoint 活用サイト <https://www.microsoft.com/ja-jp/enable/ppt>」を参照。
- (5) 国際交流基金 (2011: 39) では、漢字学習の早期から、漢字を見る様々な視点を持ち、学習方法のバリエーションを広げることが大切であるとしており、報告者もこの漢字学習観を参考とした。
- (6) ページを運営している教師は次のとおりである。アッチャラーポーン プンクワン、ワンナーボン カノックサブ、ランシダー パームブーンキットワッタナ、ナンナパット ノンターノーク

#### 〔参考文献〕

- 加納千恵子・大神智春・清水百合・郭俊海・石井奈保美・谷部弘子・石井恵理子 (2011) 『日本語教育叢書「つくる」漢字教材を作る』スリーエーネットワーク
- 国際交流基金 (2011) 『国際交流基金 日本語教授法シリーズ 第3巻「文字・語彙を教える」』ひつじ書房
- 国際交流基金「日本語教育国・地域別情報 タイ (2017年度)」  
<<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2017/thailand.html#KYOSHI>>  
(2020年12月5日)
- 篠崎摂子・小玉安恵 (2003) 国際交流基金 日本語教育通信「授業のヒント 漢字の導入 (オリエンテーション)」<[https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/hint/pdf/tushin47\\_p18-19.pdf](https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/hint/pdf/tushin47_p18-19.pdf)>  
(2020年12月5日)
- 中尾有岐・プラパー セントーンスック (2017) 「タイ中等教育向け教科書『あきこと友だち』の改訂—コミュニケーション能力の向上を目指して—」『国際交流基金日本語教育紀要』13、101-116
- ブッサバー パンチョンマニー・今枝亜紀・プラパー セントーンスック (2005) 「タイの中等教育用日本語教科書作成プロジェクト」『国際交流基金バンコク日本文化センター紀要』2、147-157、国際交流基金バンコク日本文化センター